

※朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、自由に読点「、」を打ち直してください。

テキスト3

『ロンヴィル』

イーサンはふと足を止めた。一軒の店の前だった。開け放たれたドアを囲むように外壁には青いタイルが貼られている。しかし、その青はすっかり色褪せ、ところどころ欠け落ちていた。古びているというよりも、朽ちかけているという印象の方が強かった。

イーサンは店の中を覗き込んだ。バーだろうか。手前にカウンター席があり、その奥にアップライトのピアノが置かれている。今、一人の女性がそのピアノを弾いているところだった。

「ああ、いらっしゃいませ」

気配を感じたのか、彼女は鍵盤から指を離して振り返った。店内に差し込む光は弱かったが、ぼんやりと彼女の姿を浮かび上がらせていた。思っていたよりも若い女性だった。

「お客さんが途切れたので、ちょっとピアノを」

彼女が恥ずかしそうに微笑んだ。多分、ピアノは初心者であろう。言っては悪いが、彼女の演奏はたどたどしいものだった。

「きみがさっき弾いていた曲だけど――」

「え、聴いていたんですか」

「もしかして、きみはロンヴィルの出身かな？」

「いえ、違いますよ」

「じゃあ、どうしてあの曲を知っているんだろう」

彼女が奏でていた曲――それは故郷の村〈ロンヴィル〉に伝わる曲であった。だからこそ、イーサンはここで立ち止まったのだ。

「僕の故郷なんだ。とても小さな村で、人口は五百人程度だった。ただ、それはもう数十年前の話だから、今はもっと少ないと思う。下手をすれば誰も残っていないかもしれない」

村の中央広場には、大きな石造りの噴水があった。それがロンヴィルの象徴でもあった。四方に山々がそびえているため、水源が豊かだったのだ。

だが、きっと今はあの噴水の水も途絶えているだろう。イーサンが村を去る時にはもう枯れかけていたのだから。

「オーナーですね」と、彼女が明るい声で答えた。「この店のオーナーがその出身なんです。さっきの曲も彼から教えてもらいました」

驚くと同時に、イーサンの胸にじわじわと込み上げてくるものがあった。こんなところ

に同郷の人間がいたとは……。

「オーナーに会えるかな」

「ええ、自宅に行けば。かなり高齢なので、たまにしか店に来ないんですよ」

彼女は少し寂しそうな表情を見せたあと、そこに優しげな笑顔を重ねた。

「オーナーはこのピアノでよくあの曲を弾いていました。わたしよりちょっとだけ上手いくらいですけどね。村は消えても音楽は残る——それが口癖で」

イーサンはぐっと息を飲み込んだ。

村は消えても音楽は残る、か。

確かにその通りだった。故郷を去ってから数十年が経つというのに、あのメロディを覚えていたのだ。高揚するような曲ではない。どちらかといえば陰気で単調な曲である。それなのに、ほんのワンフレーズを耳にただけで、イーサンの体はすぐに反応した。

「もう一度、弾いてもらえないだろうか」

「え？ わたし、まだまだ下手なのに」

「そうかもしれない。でも、きみの演奏を聴いて、僕にはロンヴィルの村がはっきり見えた」

そう、あの美しい山々も、高く吹き上がっていた噴水も、はっきりと。

「それは——再会の曲なんだ」

彼女は一つ頷くと、再びピアノを前にした。

ぎこちない指が鍵盤の上を滑りはじめる。

イーサンは朽ちかけた青いタイルを眺めながら、ゆっくりと目を閉じた。

(了)